

『更級日記』の孤独のありよう

安 貞 淑

孝標女は、少女時代から年齢、季節を問わず山里で人が訪れぬ孤独の歌を詠んでいる。彼女の誰かを待つ状況は、日記全体に一貫しており、常に歌を通して表現されている。五〇年余りの人生の中で種々の人と出会ったはずであるが、日記に登場する人間関係は限られており、晩婚ではあるが、結婚生活を営んでいたものの、夫や子女といった最も身近な存在に関しては語っていない。

また、上洛の記では、父をはじめ、兄、姉、継母などの存在は認められるが、具体的に登場しておらず、山中など人里から離れている所に孤立しているものに関心を寄せている記事が多く見られる。そして、上京後は他者の心の孤独を思いやる記事や、「音もせぬ」

「おとづれぬ」状況によって待つ場面や作者の思いが他者に通じない対人関係が描き出されている。

ここでは、これらの記事を中心に孝標女の孤独のありようについて考えてみたい。

『更級日記』の冒頭の記事中の、

一

『更級日記』の孤独のありよう

つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかさまされど、わが思ふままにそらにいかにかおほえ語らむ、

P 一三

について伊藤守幸氏は、「この場面は、《その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど》について語るができないうために、《人々》の会話の世界に入り込めないという状況を語って、対人関係における最初の疎外感の表出」と作者の特異な孤独のありようを読み取られている。伊藤氏が言われる冒頭部に読み取れる疎外感とは、「姉継母などやうの人々」が作者を疎外しているというわけではなく、彼らの世界に入っていけないと思う、つまり「その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど」を皆で語れない作者の抱いた自意識による孤独感であろう。が、上京後の世界には他者との関係において、作者が誰かの訪れや便りを待つという場面があり、そこには作者の思いが相手に通じない孤独が存在する。

まず作者、孝標女が人の訪れや便りを待つ場面である。

① いつしか梅咲かなむ、来むとありしを、さやあると、目をかけ

て待ちわたるに、花もみな咲きぬれど、音もせず。思ひわびて、花を折りてやる。

頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春は忘れざりけり
と言ひやりたれば、あはれなることも書きて

なほ頼め梅のたち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふな
り
P 三二

一四歳の作者は、憧れの京都に着き、喜ぶ間もなく上総で「その物語、かの物語、光源氏のあるやう」など、いろいろな物語の世界を聞かせてくれた継母と別れる。この継母が父孝標と別れる際、「これが花の咲かむをりは来むよ」と言い残して去つたため、幼い作者はひたすら梅咲くときの再会を待ち望んでいたが、継母は花が全部咲いてしまつても訪れてこなかった。そこでこの歌を贈つてい

る。
また、東山において、

② そこなる尼に、「春まで命あらばかならず来む。花ざかりはまづ告げよ」など言ひて帰りにしを、年かへりて三月十余日にならば、
契りおきし花のさかりを告げぬかな春やまだ来ぬ花やには

はぬ
P 五四

作者一九歳、孝標女は昨年、東山に滞在していたとき、そこに住む尼に「春まで命あらばかならず来む」「花盛りはまづ告げよ」と言つて帰つて来たのだが、春になつて三月十余日を過ぎても尼からは何の便りもない。そこで作者の方からこの歌を贈つた。ところで、この贈歌には尼からの返歌が贈られていない。秋山虔氏はこれについ

て、「春まで命あらば」といった思わせぶりの言葉を使うなど、物語好きで歌がちな作者をこの世を捨てた尼は相手にしなかつたものか」と解されるが、たしかにここでは花盛りに関心を持ち、その知らせを待つ作者の思いが、そこに住んでいる尼に通じない孤独が伺われる。日記全体を通して作者は、他の箇所でも尼の存在に特別な関心を寄せ、その境遇を理解しようとする姿勢が伺えるが、こういう情緒は作者の内面の孤独と何らかの関連があると思われる。

③ 東は野のはるばるとあるに、東の山際は、比叡の山よりして、稲荷などいふ山まであらはに見えわたり、南は双の丘の松風いと耳近う心ほそく聞こえて……月の明かき夜などは、いとおもしろきをながめ明かし暮らすに、知りたりし人、里遠くなりて音もせず……

思ひ出でて人こそ訪はね山里のまがきの荻に秋風は吹く

P 六八

作者二九歳頃、待ちに待つた父の帰京。しかし、その喜びも東の間、父は「人の上にも見しに、老いおとろへて世に出で交じらひしは、をこがましく見えしかば、われはかくて閉ぢこもりぬべきぞ」と引退の意志を口にした。その心細さの中でも作者は、西山から野原が遠くまで開けている自然に目を向け、知り合つていた人から音沙汰がないと思ひ、歌を贈つたのである。地の文の「引板ひき鳴らす音」と「知りたりし人」の「音もせず」は対照的表現となつており、歌の方でも、「人こそ訪はね」に対して「秋風は吹く」とが対照されている。「訪ふ」「訪はぬ」ことは、作者にとつて重大な関心事であつたようである。

④ いにしへ、いみじうかたらひ、夜昼歌など詠みかはしし人の、ありありても、いと昔のやうにこそあらね、たえず言ひわたるが、越前の守の嫁にて下りしが、かきたえ音もせぬに、からうじてたよりたづねてこれより、

絶えざりし思ひも今は絶えにけり越のわたりの雪の深さに
と言ひたる返りごととに、

しらやまの雪の下なるさざれ石のなかの思ひは消えむもの
かは
P 九八〇九

孝標女は中年期のある日、格別に親しく交際し昼夜歌など詠んでやりとりしていた友人が、越前守の嫁として夫の任国に下つて以来、消息も途絶えてしまったので、つてを探してこの歌を贈る。「いにしへ」という時間がいつ頃を指すかは不明であるが、「夜昼歌など詠みかはしし」ことができる関係とは宮仕えでの同僚であつたのであろう。

⑤ ねむごろに語らふ人の、かうてのち、おとづれぬに、

今は世にあらじものとや思ふらむあはれ泣く泣くなほこそ
は経れ
P 一一〇

これは夫の死後の、老境の寂しい暮らしの中で、親しく交際している人から音沙汰がないので作者の方から歌を贈る場面である。こゝでも「ねむごろに語らふ人」の存在については知る由もないが、親密な知人から音沙汰が無くなったことに、「世にあらじものとや」と詠んだのは「和泉式部集」(二三五)の、

同じ頃、傳の殿に

さる目見て世にあらじとや思ふらんあはれを知れる人の問はぬ

『更級日記』の孤独のありよう

は
にも見られるもので、あんな悲しい目に会つても生きてゐるのに訪れてもらわぬ孤独感を詠んだ歌である。それでも自分から歌を贈っているのである。

⑥ 人々はみなほかに住みあかれて、ふるさとに一人、いみじう心ほそく悲しくて、ながめあかしわびて、久しうおとづれぬ人に、
茂りゆく蓬が露にそぼちつつ人に訪はれぬ音のみぞ泣く
尼なる人なり。

世のつねの宿の蓬を思ひやれそむきはてたる庭の草むら
P 一一一
これは、孝標女の夫死後における孤独な日々が描かれている日記最後の場面である。つまり、夫俊通の死後、同居していた人々は皆、他の所に住み別れて、作者一人で心細く、悲しくて、便りをくれな
い尼に歌を贈つたのである。

以上、六箇所の「音もせぬ」「おとづれぬ」といった共通語は、継母、尼、物語や歌のことを語り合つた親しい人達から音沙汰がないので、作者の方から歌を贈る場面が使われていた。そして、これらの人物中、「そこなる尼」「知りたりし人」「夜昼歌など詠みかはしし人」「ねむごろに語らふ人」などは該当する人物との関係については何れも不明であるが、作者が訪れて来てほしいと思つた人の対象は、尼か、物語や歌に関心のある人達であつた。

さて、⑥の夫の死後の末尾部分は、作者の宗教意識の捉え方をめぐる問題として、しばしば議論されるところである。それは、夫の死後、天喜三年十月十三日夜の阿弥陀仏来迎の夢を実際の時間的序

列と逆転させ作者の宗教的帰依を伺わせた後に、再び夫の死後の老残孤独の境涯が記されたことについての解釈である。即ち、浪漫的理想から現実の認識を経て阿弥陀信仰へと作者の精神の段階的發展を論じた従来の家永三郎氏説³に対して、秋山慶氏は「では、なぜ『更級日記』は阿弥陀仏来迎の夢の記事によって閉じられなかったのか、さらに阿弥陀仏来迎の夢だけを来世の頼みとしたことを述べた作者が、この夢の記事に続けて底知れぬ孤独と不安の境地を語り添えたのか」と疑問を示されているのである。ところが、この場面の歌のやりとり注意到してみると、宮仕え生活での次の場面、

御前に臥して聞けば、池の鳥どもの、夜もすがらこゑごゑ羽ぶ
きさわぐ音のするに、目も覚えて、
わがごとぞ水のうきねに明かしつつ上毛の霜をはらひわぶ
なる

とひとりごちたるを、かたはらに臥したまへる人聞きつけて、
まして思へ水の仮寝のほどだにぞ上毛の霜をはらひわびけ
る

P 七九

の贈答歌と同じ語調であることに気が付く。つまり、両場面とも作者の夜眠れない孤独感を訴えているが、相手の人の返歌をみると、宮家での「かたはらに臥したまへる人」は「まして思へ」を、⑥の尼の返歌では「思ひやれ」の語が用いられ、作者より孤独な状況にある自分の境遇を理解させることによって、作者を慰めようとしている。それは、作者にとつては孤独なはずの状況が他者から見れば、または他人と比べれば、彼女の現在は決して人より不幸とは言えない状況であることを意味し、結局は作者の孤独な心境が他者に同感

を得ていないことになる。作者はおそらく常に自分の現在を自ら不幸と思ひ込み、あるいは不幸なふりをして一生自己の人生に満足することが出来なかったのかもしれない。それが彼女の孤独のありようではないかと思われる。

したがって、作者の宗教意識をめぐる⑥の場面は、夫の死によつてはじめて孤独な現実に陥り、阿弥陀仏来迎の夢を逆転させたことによつて完全に仏道に入ったとも断言できないものであり、また、夫死後の老残の作者が底知れぬ孤独に悩まされ、最後まで暗くて不安の境地を通したとも言えない、一八歳の時から山里で人に問わぬ孤独を訴えていたような、作者の好みによる老境の一人の世界を描いたものであると考えたい。そして、①―⑥の場面を孝標女の一つの孤独のありようとして捉えたい。また、それは彼女の和歌世界の素材にもかわるものであるが、作者が待ち焦がれていた対象が、父と別れた継母や俗世を捨てた尼などの限りのある人間関係であったことにも彼女の孤独の特徴が見られる。

二

誰かを待つ場面の中で、特に③の「里遠くなりて音もせず」のように、山里か山路など人里離れた所において、そこでの人の訪れない孤独を訴えている場面は、『更級日記』のもう一つの孤独のありようとして捉えることができる。

A 三月のついでたちごろに、西山の奥なる所に行きたる、人めも見えず、のどのどと霞みわたるに、あはれ咲き乱れたり。

里遠みあまり奥なる山路には花見にとても人來ざりけり

B 山のかげ暗う、前近う見えて、心ぼそくあはれなる夕暮、水鶏
いみじく鳴く

たたくとも誰かくひなの暮れぬるに山路を深くたづねては
P 四八
来む

C 雪の、日を経て降るころ、吉野山に住む尼君を思ひやる。

雪降りてまれの人めも絶えぬらむ吉野の山の峰のかげみち
P 四七

前述の③を含めて、これらの場面には各季節別の景物とともに人の訪れない山里の孤独が詠み込まれている。Aは春の西山、Bは夏の東山、Cは冬の吉野山、③はまた秋の西山である。A、B、③は、作者が人気のない山里においてそこの孤独を訴えたものであるが、Cは作者が雪の日の人里離れた吉野山の尼君の孤独を推し量って共感を示したものである。これらについては、拙稿『更級日記』における四季と和歌』で触れたことがあるが、四季おりおりの山里生活の孤独を描いたのは、おそらく彼女自身がそういう生活に憧れ、そういう情緒を好んでいたからであろう。

次に、日記には山中の人里離れているものに深い関心を寄せている場面が多く描かれている。

日の入り際のいとすこく霧りわたりたるに、車に乗るとてうち見やりたれば、人または参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる悲しくて……
P 一四

と、上総を出発する前に一人で一生懸命にお祈りした薬師仏が依然と立っている姿、

『更級日記』の孤独のありよう

閑近くなりて、山づらにかりそめなる切懸といふものしたる上より、丈六の仏のいまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やりたり。あはれに人はなれていづこともなくておはする仏かな、
P 三〇

と、「逢坂の関」近くになった所で山側に丈六の仏が、荒作りのみまで寂しく人里離れた所に頼りなげに立っている姿、この「逢坂の関」の丈六の顔は、中期の石山詣道中の記事でも、

関寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり、荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、

と思ひ出されているが、少女時代の、上洛の記のおわりにも、

ここのら国々を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。
P 八七

と記載され、丈六の寂しい姿は幼い作者により強烈な印象を残したようである。

また、足柄山を越えるのに、

山のなからばかりの、木の下のわづかなるに、葵のただ三筋ばかりあるを、「世ばなれてかかる山中にしも生ひけむよ」と、人々あはれる。
P 三三

と、やはり山の中腹あたりにある木の下のほんのちよつとした所に葵が生えている様子に関心を寄せ、それを感嘆する一行の言葉の意味深く感受し書き留めているのである。

次は、作者が他人の心の孤独を思いやっている記事である。

苦といふものを一重うち葺きたれば、月残りなくさし入りたるに、紅の衣上に着て、うちなやみて臥したる月かけ、さやうの

人にはこよなくすぎて、いと白く清げにて、めづらしと思ひて
かきなでつつうち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、

いそぎ率て行かるこち、いとあかずわりなし。 P 一七

孝標女は、特に乳母と互いの愛情が格別であつたらしいが、こ
こでは、「松里の渡し」の船着き場における乳母の産後の状況を描い
ている。そのうち「男などもなくなして」「男なども添はねば、い
と手放ちにあらあらしげにて」等と、少女のまなざしで女にとつて
男の存在に対する孤独を深く見ており、月光の中の美しくやつれた
乳母の孤独な姿を十分理解しているように、乳母を残して別れるの
をつらく思う作者である。

また聞けば、侍従の大納言の御むすめ亡くなりたまひぬなり。

殿の中将のおほし嘆くなるさま、わがものの悲しきをりなれば、
いみじくあはれなりと聞く。 P 三三

上京した翌年の春、乳母が亡くなり、引き続き、作者が歌の筆跡
を手本にした藤原行成の姫君が一五歳で世を去つた。作者はこの時
も、まず妻を失つた夫の孤独を見ようとし、長家の悲嘆の様子を自
分の悲しみと重ね合わせて思ひやっているのである。

なお、時期離れの自然に対する関心も孝標女の心の孤独から表出
されたものと捉えよう。

・夏は大和撫子の、濃くうすく錦を引けるやうになむ咲きたる。

これは秋の末なれば、見えぬ」と言ふに、なほ所々はうちこほ
れつつ、あはれげに咲きわたれり P 二二

・宮路の山といふ所越ゆるほど、十月つどもりなるに、紅葉散ら
で盛りなり。

嵐こそ吹き来ざりけれ宮路山までもみち葉の散らで残れる

P 二八

・三月つごもりがた、土忌に人のもとにわたりたるに、桜さかり
におもしろく、今まで散らぬもあり。

あかざりし宿の桜を春暮れて散りがたにしも一目見しかな

P 三八

・十月つごもりがたに、あからさまに来てみれば、こぐらう茂れ
りし木の葉ども残りなく散りみだれて、いみじくあはれげに見
えわたりて…… P 五三

沢田正子氏は、『更級日記』の美意識を論じるのに、「孝標女は『源氏物語』を熱愛し、彼女にとつて文学への誘いは『源氏物語』そのものにあり、『源氏物語』から『紫式部日記』へと見られる非充足的な消極美の系譜の中に『更級日記』も流れている」と述べられた。一見、『更級日記』を一読した後の感想は、夢多き或る女性の平凡な人生のような印象を受けるが、前述した度々人離れた場所やそこに存在するものに対する繊細な観察や思いやり、そして、誰かを失つた際の喪失による孤独に対する理解力などを考えれば、『更級日記』が「非充足的な消極美の系譜」の中にある作品という沢田氏の指摘は適切であると思われる。そして、「非充足的な消極美」に作者の個性を見ることができ、おそらくそのような精神は表現力は異なつていても全巻を覚えるほど熱愛した『源氏物語』の作者、紫式部の影響が最も大きかったのであろう。

次に、日記の中で作者が徹底的に自分一人の世界を作っていた場面の用例をいくつか取り上げてみよう。

・いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、P一三
 ・車に乗るとうち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、
 P一四

・わづかに見つつ心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず几帳の内うち臥して、引き出でつつ見るこ
 ち、
 P三五

・夢に……と言ふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、
 P三五

・夢に見ゆるやう……と言ふと見て、人にも語らず、なにも思はず、
 P三七

・……こと人の目には見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに……わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、
 P一〇九

・人々はみなほかに住みあかれて、ふるさとに一人、いみじう心ほそく悲しくて、
 P一一一

作者は、祈るときも人のいない所でひそかに、渴望した『源氏物語』も一人で耽読し、夢を見ても人に語らず、日記最後の場面でもたった一人である。

鈴木一雄氏は、『平安時代の女流日記はすべて作者の心の孤独に

『更級日記』の孤独のありよう

発し、孤独な魂が孤独な読者に訴えているという孤独の文学」と述べられている。たとえば、『かげろふの日記』が夫兼家との二年間の夫婦生活の中で、「二人の世界」を構築しようとしたところから生まれた孤独を描いたものとすれば、『更級日記』は最初から一人の世界に生きようとした心の孤独を描いた作品といえよう。『更級日記』の作者は今までの用例から分かるように、どのような場であっても、誰と一緒にいても自分自身であり一人でしかない。彼女の内面の世界を支える物語に対する憧れも、神や仏に対する信仰も、晩年まで縛り続けてきた夢も誰にも言わずに一人で抱え続けたのである。また彼女は、稲賀敬二氏が指摘されたように「最も切なる思いを心のうちに抱き続けて、決して人前に示さない性格」であり、周囲の声に動かされること殆どなく、『かげろふの日記』や『和泉式部日記』などに見られる男女の揺らぎ崩れる女の色を見ることのできない。孝標女は、他の女流日記作者たちのように二人の世界を構築する対象、つまり結婚生活を営み、夫の存在があるにもかかわらず、夫婦生活における孤独感は書かない。それは主題とかわるものではあるが、ある意味では平安朝のどの女流作家よりも一人の世界を自ら好んだ人であり、自己に執する心が強いだけに、彼女は徹底的に一人の世界を構築していた人であったと思われる。

そういう観点から考えれば、『更級日記』の八七首（連歌一首は除く）のうち三十首が作者の独詠歌であり、作者の方から歌を贈った場合の贈歌一六首を合わせれば、作者一人で詠んだり贈ったりした歌が四六首と半分以上を占めている。さらに、贈答歌の場合も、総四一首（歌数は作者の歌も含む）のうち、作者の方から他人に贈つ

たのが三一首と多く、他人から贈られた歌はわずかに一一首と少ない。しかも、その一〇首のうち四首が父孝標からのものであり、残りは、父の任官にあたって「同じ心に思ふべき人」から二一首と、東山で「もろともにある人」と交わされた二一首である。結局、純粹に安否の目的として贈られたのは宮仕え生活の中で「殿の御方にさぶらふ人」からの二首しかないのである。こういう和歌の形式や詠者から作者の生活ぶりを想像すれば、作者は日常生活の中で一人孤独に歌を詠んだり、訪れのない人に歌を贈ったり、常に文学創作中の孤独な作者像が目に見えよう。

四

さて、孝標女は人間をどう見ていたのであろうか。

日記には「いみじうかたらひ、夜ひる歌など詠みかはしし人」「ねむごろに語らふ人」「さぶらふ人々と物語し明かしつつ」「かたらふ人どち」「知りたりし人」「知りたる人」「同じ心に思ふべき人」等等、作者と親しく交際していた人々が登場している。そして、日記に描かれた作者は、父母や兄や姉や、乳母や継母等、様々な人々の愛情が溢れ、自分からも尼や乳母や姪や亡き中宮、しかも猫にまで深い関心を寄せた心優しい女性であった。さらに考えてみれば、『更級日記』には作者自身に関しては何論のことも、他人に対する人間批評や人間関係において悪い印象を与えるような描写はどこにも記されていない。

一方、日記の中から孝標女の関心を持った人間関係を想起してみると、父孝標に対する憐愍や尼の孤独な生活への思いやり、そして

物語、歌のことを語り合った友人たちである。五〇年余りの生涯を思えば決して豊かな対人関係とは言えないが、前述のように①②③④の場面はすべて作者の方から便りを寄せているものであった。そして日記の最後まで彼女は「おとづれぬ人」との人間関係を諦めてはいない。また、夫の死後、悲嘆に暮れたある日、

いと暗い夜、六郎にあたる甥の来たるに、めづらしうおぼえて、

月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ
P 一一〇

と、六郎にあたる甥が訪ねてきた時、作者は、月も出ない真つ暗な姨捨山にいるような私をどうして訪ねてきてくれたのだろうか、人間をあてにしていなかったかのような歌を詠み込んでいるが、それでも結局は、誰かに訪れてきてもらっている。それは何を意味するものであろうか。孝標女の対人関係は、相対的なものではなかったかもしれないが、少なくとも彼女は、日記の最後まで人間に対する期待や信頼を捨ててはいないのである。

彼女は少女時代から様々な離別を経験している。その少女時代の離別や死別に対する記憶を淡々と書きとめた孝標女。日記では人の訪れを待つ孤独があり、作者はそれを歌とともに表現している。それは少女時代の喪失感による孤独というものが作者の内部に潜在し、歌を作ったり何かを書いたりする時、生来の優しさと潜在的な喪失による記憶が融合され、彼女の文学世界の素材となり、それが彼女の文学に孤独のありようとして表現されたのではなからうか。

そして、『更級日記』の中に山里で待っている状況が多く、尼への思いとか姉の死後に一連の悲しみの歌が綴られているのは、彼女が

そのような孤独な世界を好んでいたからではなからうか。

孝標女は様々な孤独の姿を描いたが、それはむしろ孝標女自らが一生、自分（内面の世界）を山里のような空間に住まわせて、誰も（または稀に年に一度くらいは）訪れてこない孤独な状況を作り、それを好み、花や月や紅葉や雪などを眺める一人の世界の中で物を書く人生を設定していたからなのかもしれない。おそらく、『更級日記』の孤独のありようは、孝標女のそのような人生の構図から生まれたものであろう。それはまるで、彼女の理想とした、

いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通わしたてまつりて、浮舟の女房のように、山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ……

P 五六

にびつたりと相応する世界であつて、実際に今まで考察してきた場面では、殆ど「花、月、雪」を眺めて心細く歌を贈っている条件となつており、その場面での歌は、ほとんど恋人を待ち焦がれている恋歌に置き換えても良いものであつた。彼女が心細く待ちこがれていた対象は、光源氏のような貴公子であつたのであるが、彼女の人生ではそのような男性に巡り会えず、ただ、彼女の描いた文学世界の中でしか表現できなかったことの孤独、つまり彼女が「物語し明かした」対象が女性ばかりであつたことにも孝標女の孤独のありようが読み取れる。そして、⑥の日記最後の場面で「ふるさと」の表現には、今関敏子氏の「物語的情緒があり、すべてが過去となつた無人の故郷での懐旧は、孝標女より後の時代、新古今時代に流行

『更級日記』の孤独のありよう

の和歌の素材となる」という指摘にも納得がいく。『更級日記』に描かれた孝標女の孤独のありようは、生活者としての現実ではなく、文学行為を通じた彼女の孤独な状況を好む個性であつたと考えられる。したがつて、日記最後の場面は暗い夜のイメージではあるが、決して絶望ではなく、孝標女は月を眺めて、誰かを待ち望んでそういう世界の中で物語を書きつづけていたのではなからうか。

注1 伊藤守幸氏『更級日記研究』（平七 新典社）

2 秋山 虔氏『更級日記』（新潮日本古典集成 昭五五 新潮社）

3 家永三郎氏『更級日記を通して見たる古代末期の回心』（上

代仏教思想史） 昭一七 畝傍書房

4 秋山 虔氏『更級日記についての小見』（『国語と国文学』昭

二四・一〇）

5 拙稿『更級日記』における四季と和歌』（『日本文学研究』

梅光女大 平八・一）

6 沢田正子氏『更級日記の美意識』（『源氏物語の美意識』昭五

四 笠間書院）

7 鈴木一雄氏編『たつたひとりの世の中』（昭四八 至文堂）

8 稲賀敬二氏『孝標女の初恋の人は「しづくに濁る人」か』

（『国語と国文学』 昭四三・一一）

9 今関敏子氏『更級日記』考一主題へのアプローチ』（『平

安日記文学の研究』平六 和泉書院）